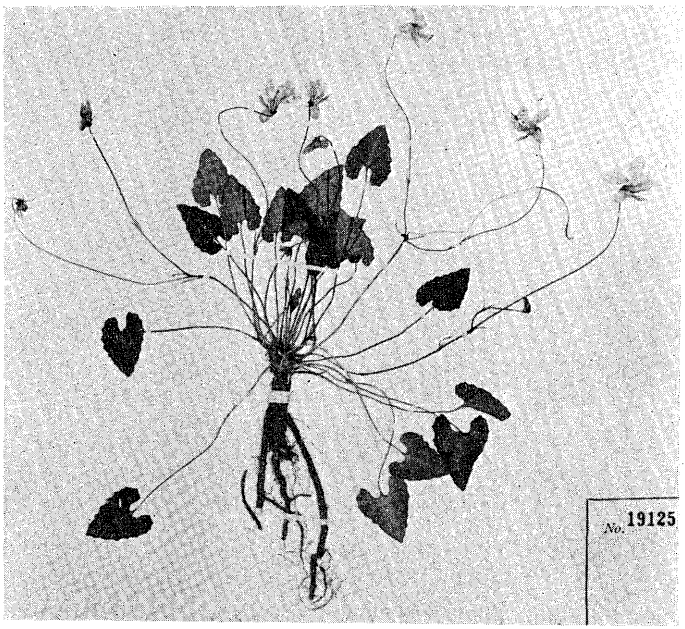
conclusion drawn by Hara (1969), who pointed out that one character varying independently and continuously should not be considered in correlation with others. At the same time, he also stated that there were many intermediate forms and different combinations of characters varying locally or with populations. Therefore, the extremes mentioned above are characterized by the subsessile and the declining peduncle, respectively, which is not correlative with the character of leaves, though rather broad leaves tend to combine with subsessile peduncle so far as the present observation in Shikoku is concerned. Besides, it is more difficult to draw the distinct line of demarcation between the broad-leaved and the narrow-leaved race.

○ヒメミヤマスミレの花序について (伊藤　栄)　Ei ITO: An inflorescence of *Viola boissieuana* Makino

スミレ属では，花は葉に腋生する1花柄の頂に単生するのが常態である。1958年3月，私は種ケ島万波で，ヒメミヤマスミレ *Viola boissieuana* Makino を若干株採集した。花柄の中間にある小苞の腋から，さらに花柄がでて，その先に花が単生して



第1図　花序をもつヒメミヤマスミレ　ca. 1/2

いるものや，さらに分枝してその先に1花づつついているものなどがあったので，興味深く思いエダウチヒメミヤマスミレと仮称していた。最近，当時の標本をとりだしてその花柄の枝打ちについて 2.3 観察したので，ここに参考のために記述しておきたいと思う。

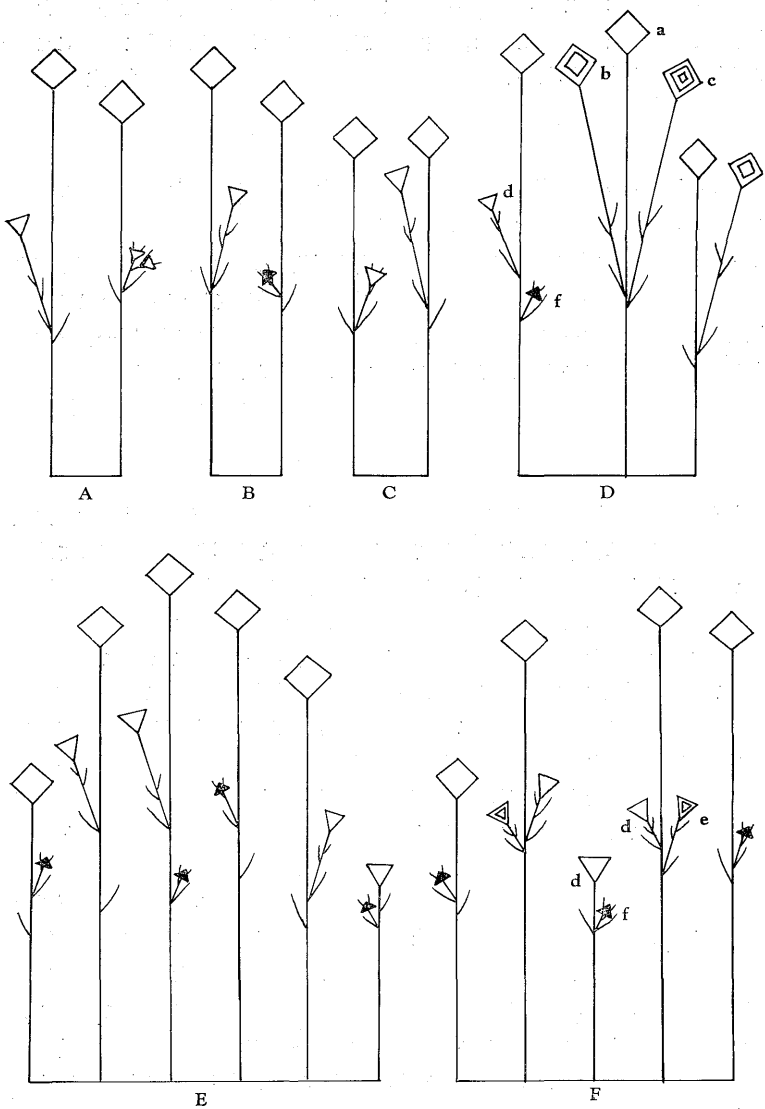
この枝分れした花序をもつヒメミヤマスミレは全体で6個体ある。同一個体では花序をなすものと単一花をなすものの比はさまざまで，A 個体では花柄4個のうち2個が花序をなしB個体では花柄5個中2個，C個体では花柄6個中2個，D個体では花柄7個中3個，E個体は花柄16個中6個，F個体は花柄6個中5個がそれぞれ花序をなしていた。その花序の状態を図式化したものが第2図である。

花序をなすもの，またその他の花柄のほとんどは小苞は互生し，したがって枝打ちもたがいちがいに行われているが，分枝したものの小苞も互生している。けれどもごく小さな花柄や分枝花柄の小苞が対生のようにみえるものもある。

こころみに科学博物館の古い標本（伊藤採集品以外のもの）67 個体，186 花柄の小苞について観察してみたところ，3 mm の間隔で互生したもの3花柄（大隅，西霧島，種ケ島万波，駿河安倍峠），4 mm 間隔のもの1花柄（大隅霧島），5 mm 間隔のもの2花柄（日向川南，遠江水窪町），8 mm 間隔のもの2花柄（日向鰐塚山，日向川南）で他は 1–2 mm 程度の間隔で互生しており，対生にみえるものもあるが，枝を打ったものは1花柄もなかった。

ところで，スミレ属植物の花の柄は葉腋に単生し，頂端に1花柄をつけるのが常態であるならば，上記の枝打ち品のようなものは1種の奇形として取扱われるのであろうが，スミレ科の他の属のもの，たとえば *Hybanthus* 属では円錐花序 (panicle) や二枝集散花序 (dichasium) をもち，*Rinorea* 属では総状花序 (raceme) または二枝集散花序 (dichasium)，*Gloeospermum* 属では集散花序 (cyme) をもっているといわれる。あるいはスミレ属の植物も，外的条件によっては，いづれかの花序をもつこともありうるのではないかとも思われる。

種子ケ島万波産のヒメミヤマスミレの枝打ち花柄では，まず第1花が主柄に咲き，直下の分枝柄に第2花が，その下の枝に第3花というふうに先端から段々に下部にむかって咲きつぐ，つまり単枝集散花序 (monochasium) の傾向をもつことがわかった。この，問題の植物はほんの通りすがりの数メートル平方に満たぬ場所で数個体採集したのだが，今回観察した他のヒメミヤマスミレの花柄の小苞が，顕著な間隔をもって生じているものの多くは亜熱帯に近い地方の産で，小苞の長さも，その他の産地のものに比して，より長いことが上記枝打ち品と共通な点なので，これらはある条件がととのえば花柄の分枝がおこるのではないだろうか。私には大変興味深く思われる。本年 (1970) 4月初旬，津村研究所の岡田稔氏から屋久島産のアツバスミレ *Viola mandshurica* W. Becker var. *boninensis* (Nakai) Mizushima を寄贈されたが，



第2図 ヒメミヤマスミレ *Viola boissieuana* Makino の A, B, C, D, E, F, 6個体の花序の模式図.
a形=第1開花 b形=第1分枝柄の開花 c形=第2分枝柄の開花 d形=開花の蕾 e形=第2分枝柄の開花の蕾 f形=開花か閉花か不明の蕾

その1品はやはり枝打ち品であった。また科学博物館所蔵のスミレ *V. mandshurica* W. Becker の標本中に1894年4月3日に伊藤篤太郎氏が薩摩指宿で採集した1個体が枝打ちであることをみいだした。注意して観察すれば或は他の種にも，このような傾向がみられるかも知れない。　　(国立科学博物館)

○再びムラサキツユクサの開花について (水島正美)　Masami MIZUSHIMA: Again on the flowering of *Tradescantia*.

本誌45巻232頁に，ムラサキツユクサの開花現象についての興味ある記事がある。それを読むと，今日咲いた或1個の花が夜に閉じ，翌朝再び開くというように受け取れる。然しムラサキツユクサは一日花であるから，翌朝に開くのは同一花序中の別の花である。此の点はツユクサ，イボクサ，ヤブミョウガと同じである。

(東京都立大学・牧野標本館)

□牧野富太郎：**牧野富太郎選集**　全5巻　B 6　各800円　東京美術。牧野先生の随筆と随想は多くの単行本におさめられているが，重複をはぶき編集し直して5巻にまとめたものである。第1巻 (4月)，第2巻 (5月)，第3巻 (6月)，第4巻 (7月) は既刊，第5巻は9月に発行の予定。第1巻のあと書きを牧野鶴代さんが書いているが，間もなく亡くなられた。第5巻には植物名の総索引がつくとのこと。これを通読して感ずることは，牧野先生のものの考え方や文章の表現形式など，ことの真髄をつく一面，稚気満々のところもあり，まことに自由奔放，わが道を行く気分が横溢している。先生に対面しているような錯覚にうたれる。しかし，先生を知らない戦後のふつうの若者にどうかと疑問をもったが，編集子によれば「結構おもしろく読まれ，売行きも悪くない」とのことで，考えさせられる。　　(佐竹義輔)

□守屋忠之：**武甲山植物誌**，B 5判，プレート，39 pp. Aug. 25, 1970。石灰岩の山として有名な秩父武甲山のフロラがまとめられた。古くは松村任三先生の採集記があり，最近では著者らのリストが一部北陸の植物に発表されていたが，完成されたものはなかった。131科913種類が挙げられ，注目すべき種類として，ここがタイプロカリテイとなっているミヤマスカシユリ，ブコウマメザクラなど22種類が解説されている。オオメシダ，ミヤマナミキ，チチブミネバリなどの新産地報告も含まれている。著者 (埼玉県秩父市近戸町 4-23) によれば，一部500円でおわけできるとのことである。　　(大橋広好)